

## キリスト教教育と私 (2)

塩野和夫

### 2

#### (1)

1959（昭和34）年4月、私は枚方市立山田小学校に入学した。入学式に臨んだ晴れがましい気持ちで記念写真に写っている。1年1組担任の竹内清先生を中心に前2列に50名余りの新生が並び、彼らを囲むように保護者が立っている。保護者の中にただ一人、年配の小さな女性が写っている。塩野ツマである。入学式直前の3月に妹の裕子を出産していた母塩野恵美子に代わり、祖母が入学式に同伴したのである。塩野ツマ・塩野ツタエ（叔母、父の妹）・塩野初恵（従妹、塩野ツタエの娘）は、父塩野元治郎を頼って門司から牧野に引っ越して来ていた。彼女たちは都丘町に転居した後もしばらく同居しており、町内のアパートに移ったのは1年ほど後のことである。父は毎月祖母に小遣いを渡していた。アパートに転居してから、祖母に小遣いを届けるお使いを私が担当した。封筒に入れた小遣いを大切に受け取ると、祖母は決まって「和夫ちゃん、ちょっと待って」と声をかけた。そして、ガマ口から取り出した20円を「これ、お駄賃」と言って、握らせるのであった。小学校2年生の私にとって、20円は大金である。山田小学校は、都丘町・須山町・甲斐田町・新之栄町に囲まれるような位置にあった。校区はさらに、南に堂山・池之宮、北に片鋒、東に田口・出屋敷・田口山と広がっていた。小学校まで2キロメートル以上離れていた田口山の同級生はバスで通学していた。都丘町の西隣り中宮東之町は明倫小学校の校区であり、小学生には異世界であった。山田小学校に入学した頃、担任の竹内は厳しく偉い人のように見え、彼の笑っている顔など想像もできなかった。上級生は大きく強くて吹き飛ばされそうで、4年生以上になると雲の上の人たちであった。同級生も皆、優れた何かを持っているように見えた。彼らと親しく遊べるようになるまでには、しばらくの

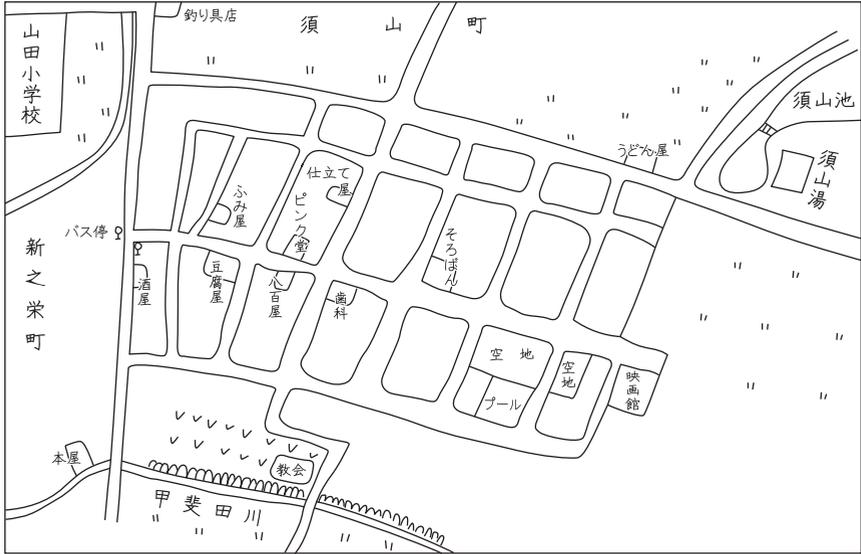


図1 1960年当時の都丘町

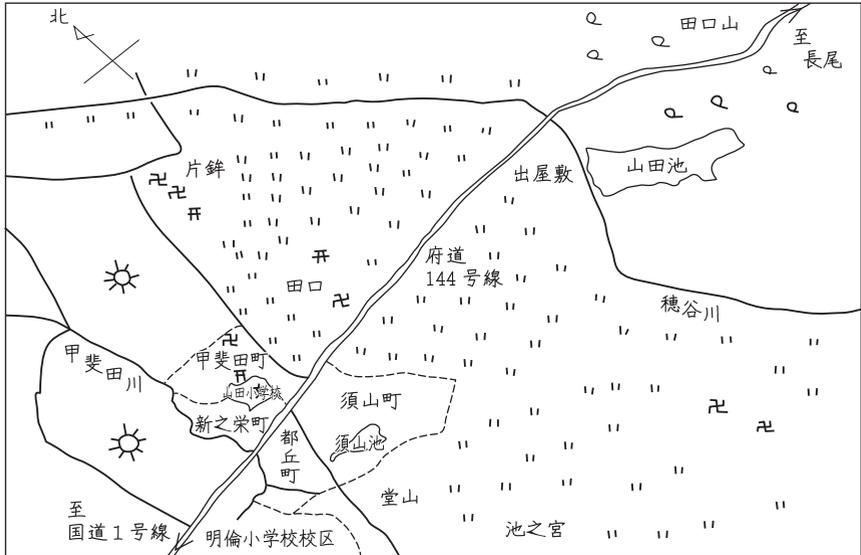


図2 1960年当時の枚方市立山田小学校校区

時が必要であった。

夢中になって遊んだのは放課後であり、休日であった。遊び仲間はみんな隣近所の友達だった。リーダーのひろあきちゃん（4歳上、男）、ひろあきちゃんの妹ていちゃん（2歳上、女）、のぶちゃん（2歳上、男）、やっちゃん（1歳上、女）、はっちゃん（同年の従妹、女）、みっちゃん（同年、女）、かとうくん（同年、男）などがいた。芝居小屋を改造した自宅には空地が残っていて、格好の遊び場になった。そこでは、べったんとビー玉をした。10数名遊んでいた中には、隣近所では見かけない子供もいた。道も遊び場になった。電信柱を使った最初の一步やかくれんぼ、それに鬼ごっこ、ドッチボールをした。明倫校区の中宮東之町との境界にあった甲斐田川より都丘町は高台になっていた。それで、甲斐田川と都丘町の間は3メートル程の斜面になっていた、崖の上にプロテスタントの教会があった。甲斐田川から中宮東之町側には田畑が広がり、所々に茂みがあった。崖と田畑、茂み、教会前の広場、それに甲斐田川はいつもの遊び場になった。秋も深まったある日、刈り入れの終わった田んぼで遊んでいると、「和夫！和夫！」と呼ぶ母の声がした。はっと気が付くと辺りはいつの間にか真っ暗になっていた。あまりに遊びに夢中になっていたため、誰も暗くなっていくことに注意できなかった。暗くなっても帰って来ないので、心配した母は仕事を中断して探しに来たのだった。崖では転倒して擦り傷をした。みんなに続いて川を飛び越えたつもりが、どぼんとはまってしまったこともある。そんな時、ひろあきちゃんはいやな顔一つしなかった。ある時は妹のていちゃんに指図して赤チンを取りに帰らせ、手当てをしてくれた。ある時は自分で家に帰り手ぬぐいをとって来てずぶずぶの足をきれいに拭いてくれた。みんな優しかった。2年生になったある日、いつものように崖に向かっていると、町内の空地で草野球をしていた上級生がいた。彼らはひろあきちゃんを見つけると、「おまえはあっちへ行け！」「おまえなんかと遊んでやらない！」などと口々に言うのである。返す言葉もなくひろあきちゃんはすごとと崖の上の教会前の広場まで来ると「修学旅行なんか行くものか。修学旅行なんかに行くよりも50円もらう方がずっといい！」と悔しそうに言うのだった。名指しで嫌がらせを受けるひろあきちゃんを前にして、悔しくてならなかった。あの時、草野球が大嫌いになった。

小学校に入学した頃、母に連れられて週2回銭湯に行っていた。須山湯である。都丘町から須山町に入つてすぐ、ひょうたん形をした須山池に架かった橋を渡ると須山湯はあった。午後3時に開く銭湯を目指し母は急いだ。3時半には珠算教室を始めなければならない。烏の行水である。銭湯はまだがらんと空いていたが、小学生にもなって女風呂は恥ずかしくて嫌だった。だから、しばらくして一人で銭湯に行かせてもらった時はうれしかった。石鹸などを入れた洗面器に着替えの下着とタオルを重ねて右脇にかかえ、夕方に男湯の暖簾をくぐった時は何か誇らしかった。

夕方の男湯は混んでいた。同級生がいた。上級生もいた。もっと年上のお兄さんもいたし、近所のおじちゃんもいた。湯船につかり、体を洗いながら、いろいろな人と話をした。松尾のおっちゃんもそんな一人だった。松尾さんはいつもニコニコ笑っていたが、障害者だった。右足の足首が曲がらないので足で地面に立てなかった。おっちゃんは体を左に傾けて右足は足の指で歩いていた。当時、京阪電車枚方市駅を大阪方面に出た所に踏み切りがあり、西側には遮断機を扱う要員用の小屋があつておっちゃんはそこで働いていた。「わてはな、農家の生まれや。けど小さい時から足に障害があつたから農業はできひん。そやから、物心ついた頃には家畜小屋で育てられていた。尋常小学校を終わると、京都へ染色の仕事を習いに行かされた。その頃、戦争で手手が無いものやから、京阪電車で踏み切りの仕事をさせてもらえることになった。ありがたいこっちゃ。」しばらくして松尾さんは京阪電車を退職した。それから毎日、不自由な体で町内の草むしりをして夕方には銭湯に行く松尾さんを見かけた。その顔にはいつもあの笑みがあつた。

銭湯にピーンと緊張が張り詰める一瞬があつた。すると決まって長身でたくましい体をした初老のおっちゃんが難しい顔をして現れるのだった。みんな彼を避けていた。私は、しかし、おっちゃんを恐いとは思わなかった。彼はかとうくんのおじいさんで、在日韓国人一世だった。芝居小屋を改造した時、便所には手を加えなかった。しかも、戦争前に作られた汲み取り式の唯一のトイレは家庭と教室の共用だった。このトイレは2カ月もするとおつりが返って来るようになり、尻やパンツを汚した。あれには本当に困った。すると、かとうくんのおじいちゃんがやって来て、大きな柄杓で汚物を汲み取ってくれる。その汲み取り方が見事なのである。どうやってあの大きな柄杓であんなにもきれいに汲み取ることができるのか。仕事をされた後はまるで新品の便所である。彼の仕事ぶりに本当のおじいちゃんを見た気がした。かとうくんとは2人

でビー玉やべったんをして遊んだ。彼の家にも行って遊んだ。すると、おじいちゃんが帰って来て、私を見るといつもこう言われるのだった。「肉を食え！肉を食え！」大声で、しかもぎこちない日本語で言われると、初めの頃は叱られているようだった。しかし、同じことを何回も言われ、聞きなれると「肉を食え！」という一言が「元気で育つために、子供は栄養のある肉をしっかりと食べなさい！」と聞けるようになった。その頃には、おじいさんを恐いとは思わなくなっていた。

\*

選挙になると、珠算教室は演説会場になった。夕方運動員が来て、正面に演説者の名前を書いた2メートル程の紙を何枚も張っていく。演説会は7時には始まる。ぞろぞろとやって来た大人で会場は熱気に包まれ、席のない人たちは後方で立っていた。会が始まると、弁士の声が壁一枚を隔てた私たちの部屋にががんと響く。「そうだ！そうだ！」という相づちも響いてくる。演説会が続く2時間余り、うるさくて何もできない。会が終わり紅潮した顔の人たちが引き揚げていく。その中に高尾のおっちゃんもいた。高尾さんは大工で、家のすぐ前の長屋の2階に住んでいた。母が珠算教室を始めて間もなく、教室の出入り口の横に家に沿ってたこ焼き屋が建てられた。建てたのが高尾のおっちゃんである。たこ焼き屋はたこ焼きを焼くスペースと、4人ほどが小さなテーブルを囲んで椅子に座り食べるスペースがあった。初めたこ焼き屋をしたのは高尾のおばちゃんである。その頃、たこ焼きは10円で10個あった。

小学校2年生のある日、竹内先生が「今日は社会見学に行く」と言った。彼は2年1組の生徒を引率して片鉾から須山町に至る道へ案内し、須山町に向かって道の右側に並べた。しばらくして片鉾方面から須山町に向けてぞろぞろと歩いてくる大人の集団があった。彼らは道端に並ぶ私たちを見ると手を振り、笑いかけた。工場労働者風の男の人たちに混ざって、仕事着の女の人たちもいた。ゆっくり行進する人たちを10分ほど見て、引き揚げた。日米安保条約の締結があって、大人が政治に熱い時代だった。

都丘町のはずれにある教会の近辺はいつもの遊び場だった。教会前の小さな広場には斜めに伸びた大きな松の木があった。松の木に登っては飛び降りて遊んだ。教会の中に入ったことも何回かある。すぐ前の長屋の2階に住んでいる人たちの中に高平さんがいた。高平のお兄ちゃんは同志社大学の学生で、大学の話を聞かせてくれた。そ

の高平さんの家族が教会に通っていた。お兄ちゃんは日曜学校の先生だった。それで、お兄ちゃんに誘われて何回か日曜学校に行った。狭い会堂に都丘町の小学生が10名ほど来ていたのには驚いた。しかし、近所の友達は誰もいなかった。それで、数回行っただけで、続けては行かなかった。高平のお兄ちゃんもそれ以上誘わなかった。

2年生も3学期になったある日、べったんの山と多くのビー玉を前にしてひとしきり考えこんでいた。べったんを初めて手にしたのは、当てもん屋りのふみやで買った幼稚園の時だった。真新しいべったんは幼い私を興奮させた。あれからどれ程夢中になってべったんをし、ビー玉で遊んだことか。しかし、2年間担任であった竹内先生は「春になると皆さんは3年生です。3年生はもう下級生ではありません」と教え諭してくださった。3年生になって、今までのようにべったんやビー玉で遊んでいたのだろうか。私はそれまで宝のように大切にしてきたべったんとビー玉を年下の仲間にくずることにした。

(2)

1961（昭和36）年4月、真新しい気持ちで小学校3年生を迎えた。3年2組の担任は女性の上山先生で、竹内先生とは何か雰囲気違っていった。上山先生は生徒の中に入って来て、親しくしようとされた。生徒もお互いに仲良くして、「みんなで良い3年2組にするように」と指導された。

3年生になって間もない5月のある日、教室の正面中央に椅子をおいて座った上山先生はその前にもう一つ椅子をおいて言われた。「これからみんなの耳の掃除をします。名前を呼ばれた人は前に出てきて椅子に座りなさい。」教室は静かになった。50名余りの生徒は名前を呼ばれると、「はい！」と返事して前に座った。順番が来て「塩野君」と呼ばれた時は、緊張した。みんなの前で耳たぶを引っ張って、先生は右と左の耳を覗き込んだ。「何もありません。きれいです」と言われ、ほっとした。しかし、耳の掃除をされた者が5名ほどいた。その一人が田中君で、その頃薄汚れた身なりをしていた。耳掃除をしてもらった後、彼は体を斜めにして恥ずかしそうに笑っていた。

2学期になって、欠席が目立つ生徒が出た。新庄さんである。上山先生は彼女の欠席について言われた。「新庄さんの欠席が続いています。それで先生が家庭訪問をして、学校に来るように言わなければなりません。でもその前に、3年2組のみなさん

が新庄さんの家に行って、学校に来るように誘って下さい。」その日の放課後、私たちは連れ立って田口と出屋敷の間に新庄さんを訪ねた。彼女の家は田んぼが広がる中にぽつんと立っている一軒屋で、広い敷地と家があった。なんでも新庄さんのお宅は元庄屋さんだったけれども、戦後財産を失ってしまった。その上、ご両親がおられず、彼女はお祖父さんとお祖母さんに育てられていると聞いた。10名ほどの生徒が玄関に並び、「新庄さ～ん」と呼んだ。しばらくして不思議そうな顔をした新庄さんが出てきた。彼女はやはり病気ではなかった。それから家の中や庭でみんなと遊んだ。翌日から3年2組には新庄さんの姿が戻っていた。

3学期になって悲しい出来事があった。田中君のお母さんが亡くなったのである。いつから病気だったか知らない。けれども、彼の服装に汚れが目立つようになっていた。お母さんの具合が悪かったのである。3学期に私は学級委員長であった。上山先生は私を含めて2名を学級委員の中から指名し、先生と3人でお葬式に行った。田中君の住居は敷島寮の第2寮にあった。小学校の校舎ほどもある大きな建物が道に沿って3棟並んでいた。道側から第1寮・第2寮・第3寮で、第2寮は真ん中であつた。田中君のお宅に着くと中に入った。人がいっぱいいた。暗く重たい空気である。あの空気が死を語っていた。それは私が初めて人の死を感じた時である。帰りに受付で粟おこしをもらった。だが、自宅に帰ってからも粟おこしは喉を通らなかった。死のショックが大きかったためである。

\*

小学3年生になった時ひろあきちゃんは中学生になり、一緒に遊べなくなった。すると、ひろあきちゃんをリーダーにしたグループも集まらなくなった。3年生になると隣近所の友達グループから自立し、同級生から新しい友達を探すようになっていた。

声を掛け合ったのは、3年2組で出席番号がひとつ前の五郎川君である。穏やかな性格でみんなから信頼されていた彼は、自宅のある敷島寮に遊びに来るように誘ってくれた。敷島寮は都丘町と須山町の境界にある道を南に200メートル程に行き、堂山町に入ってすぐの所にあつた。道の東側に大きな建物である寮が3棟並んでいて、その前には広い運動場があつた。寮から道を隔てて西側には地下に造られた防空壕があつて、広い空間がコンクリートで固められていた。当時は、鉄製の梯子で下へ降りることもできた。敷島寮に着くと、五郎川君だけでなく、田中君や水野君など5名ほ

どの同級生があつという間に集まってくれた。寮には遊べる場所がいっぱいあった。学校にいる時よりも、みんな生き生きしていた。

間もなく、五郎川君が新聞配達を始めることになった。夕刊だけで100部程、場所は明倫校区である。彼によると、それで1カ月2000円ほどお金をもらうことができ、お金は家に入れるという。私も手伝うことにした。待ち合わせ場所は宮之阪みやのさかにある中宮第1団地の入口である。五郎川君は学校からまっすぐ新聞配達所へ行き、肩にずしりとくる新聞の束を抱えてやってくる。私は自宅に帰るとランドセルだけを置き、真つすぐに約束の場所へ向かう。団地は傾斜地にあり、4階建ての集合住宅が並んでいた。階段に面した8軒について五郎川君から配達先の家を聞き必要部数の新聞を受け取ると、一軒ずつ郵便受けに新聞を入れていった。ところが数日後家に帰るなり、母が言うのである。「お母ちゃんは千里眼や。和夫がどこで何をしてるか全部知ってる。新聞配達は止めとき。」珠算教室には明倫校区からも習いに来る生徒がいた。誰かが新聞配達を手伝う私を見て告げ口をしたのであろう。だが、母に注意された以上、続けることはできなかった。いつしか、敷島寮にも行かなくなった。しかし、小学校で彼らとは気持の通じ合う友達だった。高校2年生の6月、梅雨に入った頃だった。都丘町のバス停を降りると雨が降っていたが、傘はない。仕方がないので鞆を左手に持ち右の肩には柔道着をかけ、雨の中を歩き始めた。10メートル程行った時、後ろから傘をさしかけてくれる青年がいて、「塩野、お前いつまでも幼いなあ！」と声が出た。田中君である。縦縞の濃いスーツにネクタイを締め大人びた田中が、私を見て微笑みかけていたのである。

4年生になったばかりの4月に、突然加藤君が訪ねてきた。彼とは幼稚園の時からの友達でよく遊んだが、2人だけで遊ぶことが多かった。みんなとはあまり遊ばなかったというより、遊ばなかったのかもしれない。在日韓国人3世の加藤君には独特の嗅覚があって、日本人を峻別していたのだろう。在日韓国・朝鮮人に対して心ない差別をする人たちが周辺にもいたからである。そんな加藤君が見たことのない表情をして、突然引っ越すことになった、両親のいる豊中に行くのだと言う。たった10分ほどの挨拶の時間が、とても長く感じられた。それにしても加藤君のあの固い表情は何だったのか。1年後に同じ表情を見て、その謎が解けた。確か小学校1年生の時引っ越してきた和田君が、また引っ越しをすることになったと挨拶に来たのは5年生になる春だった。大柄な和田君はがき大将だった。その和田君が玄関先で挨拶を終えると、

「わあ！」と泣き出したのである。精一杯堪えていた涙をこらえ切れなくなって泣いている。あのように周辺を気にせず泣く友達を始めて見た。別れがとでもつらくなった。涙をこらえていた和田君は1年前の加藤君と同じ固い表情をしていた。

\*

3年生になった頃、家が急に貧乏になった。幼稚園の時から、唯一の贅沢は1年に1度町内の星野さんのお店に行って服を仕立ててもらったことだった。寸法を採り星野さんが作って下さった上下揃った服は着心地が良かった。しかし、3年生になってから星野さんの店に行くこともなくなり、既製服を着た。既製服は初め体になじまず、変な感じがした。

あの時、一番生活が変わったのは父である。会社の経営が厳しくなったので、父は数人の仲間と会社の再建を計った。新しい会社を興すことも考えた。しかし会社は倒産し、半年ほど後に父は大阪にある小さな町工場で働くことになった。その時から、京阪電車がストをすると父は大阪まで歩いて仕事に行った。夜が明ける前に家を出て、大阪まで10キロメートル以上ある道を2時間あまりかけて早足で歩くのである。帰ってくると、「お父ちゃんの仕事は日給やから、一日でも休んだら給料が減ってしまう」と言うのだった。京阪電車がストで雨の日は、傘をさし長靴で出かけた。「長靴は足が滑って歩きにくかった」、帰ってくるといかにも疲れたように話していた。中学生の時である。「和夫にはお父ちゃんの仕事してるところを見せてやりたいと思う。お父ちゃんの仕事はな、紙の関係やから、夏の暑い日に扇風機は回されへんし、冬の寒い日にストーブを付けることもできひん。そんな中で、お父ちゃんは仕事してる。けどな、仕事というのはそういう厳しいものや。」<sup>2)</sup>

父は母に優しくかった。幼稚園の時から母の肩をたたく父をいつものように見て育った。そんな父に母は、「お父ちゃんは肩こりのつらさが分からへんから、あまり楽にならへんわ」とからかうように言っていた。父は笑って応えていた。香里園にダイエーが開店したのが、小学校3年生の時である。近所でもダイエーは安いと評判であった。母に代わり、父の買い物が始まった。毎週、仕事の帰りに京阪電車の香里園駅に途中下車してダイエーに寄り、父は両手にいっぱい買い物をして帰って来た。その中には必ず私たちのおやつもあった。

父の仕事が不安定なため、珠算教室の収入が重要であった。新年を迎えると父は柴

田さんのお宅へ挨拶に行き、母は京都伏見にある稲荷神社へ珠算教室の堅実な発展を祈願するため参拝した。あの頃、母は疲れていた。珠算教室では、仕事の合間を見て小学校高学年の生徒が代わるがわる母の肩をたたいていた。目をつむった母はとても気持ちよさそうだった。後に母は口癖のように、「あの頃の生徒はよく気がついた」と言うのだった。お使いにはよく行かされた。自宅から都丘町のバス停に向かって15メートル程行くと、右手にピンク堂があった。お菓子やパンを売っている店である。母のおやつにお好み<sup>3</sup>やピーナッツを買いにピンク堂へ行った。ピンク堂の前が雲川さんの八百屋である。小銭を持って、ネギなど買いに行った。もう少し行くと、蔦田さんの豆腐屋があった。晩御飯のおかず<sup>4</sup>に鍋を持って豆腐を買いに行った。バス停まで行き、左に曲がると大津さんの酒屋があった。一つ年下の井君<sup>4</sup>が幼稚園の時から病気のお父さんのため、一合のお酒を買いに行ったのが大津酒店である。夕食が作れないほど疲れると、高尾さんのたこ焼きが夕食のおかずになることもあった。都丘町と須山町の境界にある山田さんのうどん屋に注文することもたまにあった。そんな時、私が注文するのはいつもきつねうどん<sup>4</sup>で、薄揚げの甘辛さが絶妙でたいへんなご馳走だった。

\*

敷島寮に行かなくなると、勝又君（勝又君を「ほんちゃん」と呼んでいた）と遊ぶようになった。彼のお父さんは釣りが趣味で、お宅にはいろいろな釣りの道具があった。お父さんに付いて海へ釣りに行くと、ほんちゃんはその時の様子を楽しそうに聞かせてくれた。そういえば、須山池でも多くの方がのんびりと釣りを楽しんでいた<sup>4</sup>。今まで何でもなかった風景が、関心を持つと興味深いものになる。3年生の2学期になると、勝又君の誘いもあってぜひ釣りをしてみたいとなった。山田小学校に行く途中に釣り具店があり、ある日そこで簡単な道具を買った。竹竿の先に釣り糸を付けるだけのものだった。竹竿は1本30円で、小遣いで買った。早速、ほんちゃんと須山池へ行ってみた。橋の上や土手で木のない所など、釣りのできる場所は何か所もあった。それぞれの場所で大人や中学生、小学校の上級生などが数名ずつ釣りをしていた。みんなあの竹竿に釣り糸を付けただけの簡単な釣竿だった。ほんちゃんと私は空いている場所を見つけては、そこに座って釣りをした。ウキが引くことはあったが、釣れなかった。しばらく座っていても釣れる人は少なかった。だから、大きな鮒を釣りあげ

る人がいると、みんな集まって感心して見ていた。甲斐田川にも行って、少し深く底が見えない所で釣りをした。やはりあまり釣れなかった。それでも、釣ったり川に入って掬って採った魚はしばらくバケツに入れておいた。

4年生になると、短くするための竿が欲しくなった。釣り具屋でもそのような道具の話聞いた。話を聞くほどに短くなる釣り道具を持って、もう少し遠くの大きな川や池に行きたくなった。それで思い切って何百円か出し短く折りたためる竿を買い、水曜日や土曜日の午後に勝又君と天の川へ行った。中宮東之町・中宮本町・<sup>ほんまち</sup>禁野本町・<sup>きん や ほんまち</sup>宮之阪と明倫校区を1キロメートル余り南西に歩くと天の川である。ようやくたどり着いた川は大きくきれいで穏やかに流れていた。天井川になって淀川に注ぎ込む天の川のほとんどは浅瀬で釣りに適さなかった。しかし、橋げたの周辺は深くなっていたので、そこで釣りをした。勝又君がお父さんのリールを借りて出かけたのは山田池である。天の川とは反対の北東へ須山町・田口・出屋敷と1キロメートル余り歩き、田口山のふもとに着くとそこに山田池はあった。池に着くと急に視界が開けた。とても大きな池だった。待ち合わせ場所には田口山の松葉井君も待っていて、釣りをする場所へ案内してくれた。早速ほんちゃんは道具を取り出し、リールで何度も釣り糸を遠くへ投げた。ようやく竿を固定し、ひきを待ち始めた時だった。山田池の管理人と言う人が来て、「ここは釣りが禁止されている」と言って、ひどくほんちゃんと私を叱りつけるのだった。仕方がないので釣り道具を片づけ、松葉井君の案内で田口山を歩いた。山を登り始めると間もなく、斜面にいくつも横穴が掘られていた。「防空壕のために掘った穴や。近寄ったら危ない！」と松葉井君は鋭く注意した。しばらくして、田口山の防空壕跡で事故があり、「決して近寄らないように」と山田小学校で放送があった。

3年生になって母が毎月買ってくれた物がある。冊子になった本2冊である。新之栄町に雑誌などを売っている店があって、しっかりした自転車の荷台に括り付けた箱に雑誌や本を入れて配達していた。その人が毎月、日本の歴史や地理などシリーズになった冊子を2冊届けてくれるようになった。どの本も面白かった。日本の歴史は特に面白かった。幼稚園の頃、玩具入れのリング箱に桃太郎や金太郎の絵本も入っていて、取り出しては祖母が読んでくれた。小学生になると、大きな字に振り仮名のついた偉人伝を与えられた。野口英世やシュバイツァーである。日本の歴史は偉人伝と比べても断然面白かった。たとえば、壬申の乱を扱った数頁である。大海人皇子軍と大

友皇子軍が川を挟んで対峙している場面を描いた大きな絵があって、武具を持った武人を生きいきと描写していた。その前の頁には兄弟の対決に至るまでの対照的な歩みをドラマチックに書いている。私はぐいぐいと歴史の物語に引き込まれた。ある時は大海人皇子の気持ちになって本を読み、ある時は大友皇子の立場で読んで場面を想像した。はらはらどきどきしながら何回も読んだ。いつしか読書が大きな楽しみになっていた。

(3)

1963（昭和38）年4月、小学校5年生になった春から中沢のお兄ちゃんが週2回勉強を教えに来てくれるようになった。中沢さんは京都大学工学部の学生で、細身で背が高く眼鏡をかけいつも落ち着いていた。私はお兄ちゃんが横に座るとひどく緊張した。勉強は1回2時間で、2科目習った。まず国語のドリルを30分ほどで終わると、お兄ちゃんが採点し間違った所を丁寧に教えてくれる。同じようにして算数を教えてもらう。別の日に社会と理科を習い、1週間に4科目教えてもらった。手ほどきを受けると、学校の成績がたちまち上がっていった。テストはほとんど満点になり、間違っても1問か2問だった。算数が一番良くできて、理科が苦手だった。6年生の2学期になると、模擬試験で灘中学校を合格できる成績が採れた。その頃になるとお兄ちゃんは「もう教えることはない」と言いながら、相変わらずドリルを続けていた。

全国規模で行われる模擬試験にも母に連れられて出かけた。大阪で試験が実施される場合、興国高校が会場になり京橋で京阪電車から大阪環状線に乗り換え寺田町で降りて歩いた。午前中に試験が終わると大阪駅まで足を伸ばし、駅前にあるデパートの阪急か阪神の大食堂で食事した。母は「もっと美味しいものを食べたらいいのに」と言ったが、たいていきつねうどんを注文した。それは試験の後、疲れて食欲がなかったからでもあった。京都で模擬試験が行われた場合、会場は予備校で京阪三条から歩いて行った。全国で5000人を越える受験者があり、成績は3ケタだった。同志社香里中学校希望者の順位も出たが、100人余りで10番前後だった。6年生の夏には興国高校で開かれた夏期講習に参加した。岸和田市や豊中市など広く大阪府各地から100名前後の参加者があり、2クラスに分かれた。2週間で毎日4時間あったが、授業はどんどん進んだ。みんなすごい集中力で、山田小学校とは雰囲気は全く違った。

同志社香里中学校への受験は山田小学校における5年生以降の学校生活に影響を与えた。4年2組の担任永木先生は大阪の教育大学を卒業して最初の赴任先が山田小学校だった<sup>9)</sup>。だから、澁刺としていた。5年1組の担任大槻先生は自動車が大好きで親しみやすく教師経験が豊かだった。先生から私は週に一度放課後に職員室に呼び出され、隣に座らされた。テスト問題に取り組むためである。先生の奥様は大阪市内にある私立小学校の教師で、問題用紙はその私立小学校で5年生が解いているものだった。同志社香里中学校を初めて受験する生徒—実は2人目らしいが—は先生方からも注目されている様だった。

受験生は5年1組でみんなから距離を置かれるようになった。そんな5月のある日、愕然とさせられる出来事を教室で目にした。N君は4月に福岡から転校してきたばかりだった。そのNがOからいじめられていた。「返してくれ！」と小さな声で求めるNにOは「お前の教科書なんか、どこにあるか知らん！」ととぼけている。かっとなった私はOに詰め寄り、「何やってんねや。返してやらんか！」と胸元をつかんだ。OにすればNをからかって遊んでいただけのことらしい。塩野の剣幕に驚いて、Oは「いじめていたんやない。遊んでいただけや。〇〇の机の中にある」と弁解した。小学校で一度だけ本気でけんかを仕掛けた時だった。そういえば、4年2組の時にも福島県から転校してきた女子がいた。彼らはいずれもご両親が炭鉱関係の仕事をしておられて、転校してきたと聞かされていた。

10月に開かれる大運動会に備えて、6年生が100メートル走の練習をしていた時である。6人が一組になって円形に白線がひかれた100メートルのコースを走った。夢中に走り1着でテープを切って目にしたのは最後を走っているA君である。大柄なAが懸命に走っている。それでも彼は最後である。Aは小児麻痺で片手が効かない。だから加速できない。片手をぶらぶらさせながら遅れても懸命に走っているAを見た時、1着の喜びは吹き飛んだ。6年生だけど1年生くらいの体をした女子生徒が時々6年1組に来るようになった。彼女が来ると数名の女子生徒が手伝ってあげていた。その様子をいつも遠くから見ていた。中学生になって、彼女が亡くなったと聞いた。Aといい、6年生なのに1年生くらいの体をした女子生徒といい、忘れることのできない人たちとなった。

卒業式が近づくと孤独感に襲われるようになった。山田小学校の友達と今は一緒にいるが、卒業するとみんなは枚方市立第一中学校に進学する。私は一人だけどちらの

中学校に行けるか分からない。1月になって半日、第一中学校の見学会があった。みんな興味津々で出かけて行った。小学校に一人取り残された私は、職員室でテスト問題を与えられていた。さみしかった。もし同志社香里中学校に合格すれば、6年間一緒に過ごしてきた友達と別れなければならない。どうしようもなくさみしかった。そんな時、さみしさを癒すことはできなかったが、しばらくの時忘れさせてくれる出会いがあった。6年生の秋、あの本屋さんが訪ねて来て新しく出版される全集を紹介してくれたのである。小学館から毎月発行される『少年少女の世界名作全集』全50巻<sup>6)</sup>である。あれほど受験に熱心であった母が、なぜか受験勉強に追い込みをかけなければならない時に、小学館『少年少女の世界名作全集』全50巻の予約をしてくれた。第1巻『アメリカ編5』は10月に届けられた。そこに収録されていたバーネットの『小公子』『小公女』『秘密の花園』は、物語られている世界へ招きいれずにおこななかった。勉強を忘れて何回も何回も読みふけた。描き出されていた少年・少女のつらさや悲しさ、優しさと前向きな姿勢は私を深く共感させた。現実に戻るとやりきれなくさみしかったが、本を前にした時だけは物語の世界に安らぐことができた。

\*

5年生の時、高尾さんがすぐ前の長屋から町内のアパートに引っ越した。2年ほど前には一人娘の福美さん（「福ちゃん」と呼んでいた）も結婚していた。相手の西村俊雄さんは建具職人で京阪枚方市駅の南西側岡南町で仕事をしていた。2人も町内に新居を構えたので、親子はみそ汁の冷めない距離であった。アパートに移るとおばちゃんはたこ焼き屋を止めて内職を始めた。それはたとえば下着の縫い目にちよっと出ていた糸を切るといった単純な作業である。福ちゃんや近所のおばさん数人が集まって半日、おしゃべりしながらみんなで内職の山に取り組んでいた。高尾のおっちゃんが事故に遭ったのはそれから10年程経った時である。国道1号線をバイクで走っていた高尾さんはトラックにはねられ、障害者になった。おばちゃんは仕事の出来なくなったおっちゃんを看病しながら、内職を続けていた。

たこ焼き屋を一日も休むことなく引き継いだのは、井のおばちゃんである。井さんとお父さん（お連れ合いを井さんは「お父さん」と呼んでいた）は鹿児島県第2の人口がある町の出身で、結婚すると仕事を探して大阪に来られた。お父さんは枚方で鉄工所に勤め、長女（私より4歳くらい年上）・長男（1歳年上）・二男（1歳年下）と

3人の子供が生まれた。しかし、子供がまだ小さいのにお父さんは病気になる。だから、井さんはたこ焼きを焼いて3人の子供を育てた。長男は小学校低学年の頃から新聞配達をして家計を助けた。弟は幼稚園の時、病気のお父さんのため一合のお酒を買いに天津の酒屋までお使いに行った。定時制高校を卒業し就職したお姉さんはやがてお母さんを迎えにきた。たこ焼き屋を止め娘の所に行くことになり、井さんは挨拶に来られた。あの時、前掛けを付けてたこ焼きを焼いていたおばちゃんとは様子が違った。「和夫さん、…」と言うとおばちゃんは言葉に詰まった。きれいに整えた髪に帽子をかぶり上下揃った服を着て精一杯のおしゃれをしたおばちゃんは、不自然に見えた。でも、その目はたこ焼き屋のおばちゃん目だった。おばちゃんは「優しい子供に恵まれ、私は幸せです」と言葉にならない言葉で語っていた。

6年生になった春、父方の祖母塩野ツマがアパートから引っ越して家に住むことになった。胃がんだったが、本人に病名は知らされていないかった。父はおばあちゃんに「おいしいものを食べてゆっくり休めば、すぐに良くなる」と話していた。戦中・戦後、苦労ばかり続いたツマおばあちゃんの生涯であった。だが自宅で休んでいたあの時、すべてから解放されたかのようにゆっくりくつろいでいた。母が作った3度の食事をとてもおいしそうに食べていた。しばらくして町内でクリーニング店を経営していたみっちゃんのお父さんが、カメラとフラッシュを持って来られた。おばあちゃんの写真がたった1枚しかなかったからである。それが山田小学校入学式の時に撮った集合写真である。けれどもあの写真に写ったおばあちゃんはあまりに小さすぎて、引き延ばせなかった。それでお願いして写真を撮りに来てもらったのである。おばあちゃんは恥ずかしそうに写真を撮られていた。その年の12月16日にツマおばあちゃんは亡くなった。63歳だった。

\*

入学試験を控えた1月に、柴田勝正さんが同志社香里中学校・高等学校校長 村岡景夫先生に私を紹介下さることになった。いよいよ紹介いただく日、母と約束の枚方市駅南口で待っていると上機嫌の柴田さんともう一組の親子が来た。千田晋君と彼のお母さんである。5人が揃うと、柴田さんが4人を紹介して1台のタクシーに乗った。同志社香里に向かう車中、もっぱら柴田さんが話し手で4人は聞き役に徹した。千田君と私は緊張して体を固くしていた。柴田さんは「同志社香里中学校・高等学校の合

併以来、生徒の募集に苦勞して近隣の小学校・中学校を走り回ったこと」や「今回、同志社関係者の千田君と柴田の遠戚になる塩野が受験してくれて本当にうれしい」と話していた。

同志社香里の本館前でタクシーを降りた。本館は芝生を植えた庭の正面にあって、横幅が広い木造の建物で奥行きは分からなかった。さっさと柴田さんが本館の玄関から入って行くので、4人は後をついて行った。玄関から中に入ると薄暗く重厚な感じがした。玄関から少し行くと衝立があり、校長室はその奥にあった。実は山田小学校でも校長室で面接の練習を受けていた。小学校の校長室は職員室の隣にあり、校庭に面した壁には大きな窓があって明るかった。その部屋で少し遅い給食を取りながら、下村校長は「あなたは何故、同志社香里中学校を受験しますか」などと質問してきた。穏やかな性格の下村校長は給食の食べ方もゆっくりで、最後にアルミの器についていたミルクをパンでふき取って食べておられた。

柴田さんがノックすると、村岡景夫<sup>7</sup>校長の「どうぞ、お入りください」という穏やかな声をした。ドアを開けて入った校長室は広くて立派な机やソファ、本棚などがゆったりとあって、初めて見る世界だった。私たちを待っていたかのように校長は手招きして、柴田さん、千田君と私、そして2人の母親をそれぞれソファに座らせて下さった。柴田さんがまず「こちらが千田民衛先生<sup>8</sup>のお孫さんで千田君、こちらが私の遠戚になる塩野君です。この度2人は同志社香里中学校を受験してくれますので、よろしく願います」と紹介してくれた。千田君と私は黙って頭を下げた。短い挨拶が終わると村岡校長は私たち二人に交互に視線を向けながら、「私は出会いということを研究してきました。出会いは人間に対して様々な働きをします。人間を作ります。ですから、どうぞ同志社香里中学校に入って下さって、よい出会いを経験してください。お待ちしております」と穏やかにゆっくりと話して下さった。校長の言葉は静かに心にしみ込んでいった。

10分ほどで退室すると、柴田さんは前庭の左側にある道を通り、食堂に案内してくれた。「寒いから、うどんでも食べていくか」と声をかけ、柴田さんが「うどんを5杯入れてくれへんか」と厨房に向かって言った。すると中から「はいよ」と答える声が出て、食堂のおばさんがお金を払ってもいないのに注文に応じて下さった。きつねうどんだった。うどんが温まってから、タクシーで帰った。村岡景夫校長の「出会い」の話が余韻をもって響いていた。

## 注

- 1) 「当てもん屋」とは子供相手の駄菓子屋で、5円か10円の当てもんをたくさん置いていた。当てもんとはたとえば、大小さまざまな飴につながった紐の先端を固く束ねて括ってある。そのため、どの紐がどの飴につながっているのか分からない。お金を払った子供は「大きな飴が当たるように」と念じながら、1本の紐を引く。すると、上がって来た飴を子供は受け取ることになる。このような当てもんを目当てに多くの子供が駄菓子屋に集まった。
- 2) 1979年4月、日本基督教団大津教会に就職した。初めての就職を直前に控えたある夜、私は職場に向かう父を夢に見た。参照、「父のこと」(『一人の人間に』新教出版社、80-82頁)
- 3) ピンク堂は店に向かって左隅に高さが1メートル、長さが2メートル程あるガラスのケースを置いていて、ケースの中にはパンを入れていた。時に1個15円のケーキも売っていた。店の正面には子供でも覗けるくらいの高さで、奥に向かって少し高くなる傾斜のついたガラスのケースがあった。ケースは12面ほどに区分されていて、それぞれにお好みやピーナッツなど違ったお菓子を入れていた。「お好み」はあげ菓子やおかき、ピーナッツ菓子などを混ぜたお菓子である。ケースのふたを開けてお菓子を掬い取り、計り売りしていた。
- 4) 自宅前の長屋に住んでいた家族に奥本さんがいた。20年ほど後に入院している奥本のおっちゃんを見舞った。その時に、「おっちゃん、何が楽しみや」と聞くと、「須山池の釣りが楽しみやったな」と答えていた。見舞った頃、須山池は埋めたてられて、跡形もなかった。
- 5) 4年生の遠足で京都に行った時のことである。帰りに京阪三条で集合していた時に、永木先生が突然「ちょっと、待っているように!」と指示して、大きなカバンを抱えた初老の男性に向かって走って行った。みんなの前で、その男性に永木先生が繰り返し頭を下げているのを見た。小学校に帰って「あの人は大阪にある教育大学の先生で、永木先生も教えてもらった」と聞かされた。先生にも先生がいることに不思議な感じがした。
- 6) 小学館『少年少女世界の名作文学』全50巻で最初に配本された『アメリカ編5』は、1964(昭和39)年10月の発行である。
- 7) 村岡景夫校長については下記を参照。  
『同志社百年史 通史編二』1531・1536頁。
- 8) 千田民衛については下記を参照。  
『同志社百年史 通史編二』1253・1294-5・1315-6・1319頁。